琉球大学学術リポジトリ

学びあう関係づくり：
プロフェッサー・オブ・ザ・イヤーを受賞して

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学大学教育センター
	公開日: 2018-07-17
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 野入, 直美, Noiri, Naomi
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/41369

学びあう関係づくりープロフェッサー・オブ・ザ・イヤーを受賞して

「現代社会のしくみ」２組担当　野入直美（法文学部）

２年連続でＰＯＹの表彰をいただき、ありがとうございます。学生に、「先生って、プロフェッサーなんたらの人ですよね」と言われることもあり、「そう、その、なんたらよ♡」と、ますます張りきる今日このごろです。

この賞をいただいたことで、いいことがいくつかありました。高校生や市民に授業を公開したとき、全15回の授業をすべて受講する熱心な外部受講生たちに恵まれました。最前列で学ぶ高校生の姿は、大学生にいい刺激になりました。こういう受賞について、自分から誇示するのは気恥しいですが、質の高いお客さんたちに出会える可能性が広がるので、アピールするもの悪くないと思いました。

同様に、教員免許更新講座でも、私よりもずっと教育能力の高い先生方が受講してくださり、冷汗が出ましたが、私の方が勉強になりました。この教員免許講習講座（選択：国際理解教育）は、大学生向けの集中講義と合併して開講したのですが、現職の先生方の模擬授業のものすごいレベルの高さに学生たちは呆然となり、先生方も学生たちの問題意識を新鮮に受けとめてくださったようでした。私は＜ＰＯＹ＞をいただいた共通教育の授業で、学生どうしが学び合う授業についての手がかりを得たのですが、学び合いの関係づくりは、専門科目を含めた他の授業にも応用がきくようです。

この点にも関連して、＜ＰＯＹ＞の受賞によって何より私にとってプラスになったのは、大学教育センター主催のＰＯＹ受賞者によるＦＤで、授業改善のヒントを得たことです。教育学部の道田泰司先生の「人間関係論」という授業では、大講義室の講義でありながら、学生たちにディスカッションをさせています。私は道田先生の公開授業に参加させていただき、学生たちといっしょにディスカッションをしてみました。せっかくがんばってそれなりに溶け込んでいるのに、道田先生が何度もやってきて「野入先生、いかがですか」とのぞきこむので、しっしっと追い払ったりしましたが、すごく勉強になりました。大講義室で、周りがざわざわしていても、初対面の学生どうしであっても、時間が限られていても、学生たちは、課題がよければ、かなり突っ込んだ話し合いをするのです。道田先生の授業は社会心理学で、「人はどんな時に傍観する／しない？なぜ？（研究をもとに）」というのがディスカッションの課題でした。傍観というのは誰にとっても身に覚えがある行動だけに、学生たちは単に配布された資料をまとめるだけでなく、自分なりに考え、他の学生の意見に耳を傾けていました。

私は大講義室におけるディスカッションを、法文学部で提供している専門科目、社会学原論Ｉでやってみることにしました。道田先生は、ワークシート、ミニテスト、一言カードなど、学生に行わせる作業を、５分刻みで綿密に準備されています。私はてーげーなので、ワークシートの項目をざっくりと作っておき、準備５割、教室で起こったことに沿って展開５割くらいの心づもりで授業をすることにしました。また、道田先生はグループでのディスカッションの後、学生にそこで出た意見を板書させておられます。各グループの意見の広がりを視覚的に見てとることができるので、板書はとても有効だと思いましたが、私の授業では口頭でのパフォーマンスをさせることにして、マイクを回しました。もうひとつ、道田先生の授業では、ディスカッションを始める前に、先生が中途半端な席に座っている学生たちに移動の指示をして、グループ分けをスムーズにされているのですが、私の

授業では、学生たちに自力で毎週、グループづくりをさせることにしました。社会学原論Ⅰの最も大きなテーマは、相互行為です。この概念を理解するだけでなく、学生たちが授業を通じて相互行為に練達していくことを目標にしました。学生は、自分たちでアイ・コンタクトをとりあい、声をかけ、今日のメンバーが誰なのかを自分で探り当てます。自己紹介をするのか、司会者を決めるのかといったことも、学生に任せました。

最後に意見を発表させるときは、私からは正解かどうかといった評価をせず、なるべく肯定的なコメントを行いました。すると、最初は3分の1くらいのグループが、低いテンションのまま、ぼそぼそと最低限のことだけをしゃべっていたのが、だんだん「何を言っても間違いにはならないらしい」という雰囲気が広がり、グループワークの時間の延長を希望するグループが過半数を超えるようになっていきました。学生たちがお互いに学び合う潜在的な能力というのは、本気で発掘してかかれば無尽蔵なのだということを実感しました。

役割葛藤（複数の役割の間で生じる葛藤）についてディスカッションしたとき、ある学生が高校時代、生徒会長としての役割と、親しみのある友達としての役割の間で生じた葛藤の体験について語り、大講義室全体が大きな共感の拍手で包まれたことがありました。一方、フィクションで答えるのがうまい学生もいます。「影響力と暴力とではどちらが効果的に人を動かすか」という課題に対して、「影響力を持っている先輩と暴力を持っている先輩がいて、車で迎えに行くんですけど、影響力の先輩は、好きで、役に立ちたくて自発的に迎えに行くんだけど、遅刻しても多分許してくれると思うから、つい遅れちゃう。暴力の先輩は、殴られるから絶対遅れない。暴力が効果的」というコメントがありました。みんなは笑って、いったんは納得するのですが、「長い目で見たら本当に暴力の方が効果的なのか？」「そもそも、効果的って何？」「誰にとっての効果？」などの問いが立ち上がってきます。私はやはり正解めいたことを述べず、それらをそのままレポートの課題にしました。学生が、学生の立てた問いをめぐって学びを深めるという手法です。

大講義室でディスカッションを行うには、それなりにコツのようなものがあると思います。私は道田先生の公開授業に参加することで、「大講義室で話し合わせるのはムリだ」という思い込みから自由になり、道田先生が培われた方法を学んだ上で、自分に可能なやり方を模索することができました。学生どうしも驚くほどよく学びあいますが、教員どうしも、学び合う力というものは豊かに潜在しているのかもしれません。刺激的な公開授業をしてくださった道田先生に、改めてお礼を申し上げます。

最後にもうひとつ、具体的に＜ＰＯＹ＞受賞で役立ったことは、インテンシヴ経費です。私は、2006年にペルーのリマ市で、海外のウチナーンチュの青年たちのアイデンティティーについての調査を行い、科研の報告書に成果をまとめたのですが、日本語の報告書は、現地の人たちにほとんど読んでいただくことができません。インテンシヴ経費によって翻訳を行い、スペイン語・日本語の成果報告書を印刷して、関係団体にお送りすることができました。その結果、また貴重な情報が寄せられ、それを授業に還元しています。いっしょにＰＯＹを受賞した小波津フェルナンド先生に、すばらしいスペイン語訳をしていただけたことも、よいご縁となりました。

私にとって＜ＰＯＹ＞は、学部を超えて教員が教員から学ぶネットワークです。また、共通教育科目で培った教育技法を専門科目に応用し、研究成果を教育に結びつける、さまざまなつながりを編み上げていくことのできる資源です。

２年間しか連続して受賞できないということで、もうご縁がなくなるようですが、ほとぼりが冷めたら、いつでも喜んでいただきたいです。どうもありがとうございました。